

の環境<1'>へと、すでに
変貌を遂げているだろう
(和辻哲郎の「人間学」およ
び「風土」の定義に関わる論
点。オーギュスタン・ベルク
が和辻の風土にclimateでは
なく、あえてécoumèneとい
う新語を与えた根拠)。同
様に、原初の混沌<0>は、
秩序を生んだのちにそこから
排除された反=秩序として
の二次混沌<0'>とは、
論理的に位相を異にするは
ずである(これは、井筒俊
彦のanti-cosmosと丸山圭三
郎のchaosmosとで見解の分
かれた論点)。

大森荘蔵の「重ね描き」に
よる世界の「立ち現われ」を
読み替えて、小倉は世界を、
相克する視覚像の「まだら
描き」として捉える。その
(私的な)「まだら描き」の
実相を、文明史的な思想展開
の運動、極相と遷移の交代
劇として、より動的に捉え
るには、さらに幾多の参照
軸が考えられよう。例えば
山田慶児が中国の文化大革
命下で唱えた「極構造理論」
への目配せも、有効だろう。

また、梅棹忠夫の並行進
化説をことさらに忌避する必
要もあるまい。韓半島の地
勢学と知的ディアスポラの
突出性は、ポーランドやチ
ェコなど東欧圏の亡命知識
人の軌跡との並行性を傍証
しており、むしろ定住と移
民の動態として梅棹理論の
今日の再読可能性をも示唆
している。それらを展開す
る基礎的なmatrixとして、
<0>と<0'>、<1>と<1'>
さらには<2>と<2'>との
重層弁別が、「まだら」模
様のモアレ、番級の差を可視
化する手立てとして、小倉
のさらなる思索の「織」に、
幾分かは「羅」を加える上
で役立つことを期待する。
(了)

連載
128

〈2・1・0〉は東アジア社会の相互依存と相互不信とを読み解く普遍的鍵となるか(下)

稲賀繁美

小倉紀蔵著・創造する東アジア——文明・文化・ニヒリズム(春秋社、本体四〇〇〇円)を読む

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学教授

(承前) 小倉紀蔵の提唱する
<2・1・0>の哲学は、
東アジアの相補的複合性
と、それと表裏一体をなす
相互不理解の構造を大胆に
図式化して提示し、それ
によって従来からの定番
であった、欧米哲学との乱暴
な原理主義的対比を克服
する鍵を提供しようとの
壮途の表明である。これ
までともすれば、中対西、
韓対米、あるいは日本対
西欧という個別的対比が、
東洋対西洋という二項
対立を強引に代弁する
場合が多く、この無理
な置換が逆に、中韓日
の知的鼎談の相互不信
を隠蔽する知的不誠実
にも貢献してきた。

こうした限界の克服を
自らの使命とする普遍的
意識そのものも、すこぶ
る韓国的な一面を持つ
ことは、小倉が『縮み志
向の日本人』や『じゃん
げん文明論』の著者、
李御寧のうちに見ると
おり、小倉はそこで老
論派の朱子学的主体性
への参照を促すが、評
者としては、李御寧の
汎東洋思考には、華
嚴経を巧みに記号学に
溶け込ます巧緻も認め
たい。

そのうえで、最後に
<2・1・0>のさらなる
思想的発展のため、い
ささか形而上学的に見
える指摘を加えて本稿
を閉じたい。本書では
議論の進展につれ、基
本概念的な揺らぎを呈
示する。文明への一歩
という(場合によっては
私的な)運動<2>と、
いわば物象化され、情
報伝播により共有化さ
れた文明状態<2'>とは、
便宜的に弁別したほう
が、議論がより容易だ
ったのではない。また
文明へと分節する以前
の自然的世界を<1>と
するならば、文明の析
出から改めて定式化さ
れる文化は、擬似自然
として